

助けや危険を知らせる音の標準化

～音のユニバーサルデザインをつくる～

(公社) 日本消費生活アドバイザー・コンサルタント・相談員協会
東日本支部「標準化を考える会」

I. はじめに

当研究会は様々な社会課題を、標準化手法を用い解決する活動を進めている。これまでに、子ども服に付いているひもやフードの危険性に着目し、子どもを事故から守る為に、日本で初めての公的な統一規格（JIS規格）作りに主導的に参画し、2015年12月にJIS L 4129（ヨイフク）として制定・公示された。それ以降、危険なひもが付いた子ども服の流通は激減し、公的な安全基準の効果を改めて認識した。またブラインドのひもの危険性についても継続的に問題提起をして来たが、これもJIS規格制定として結実し、子どもの安全性の確保につながった。

現在当研究会は、切迫性の高い社会課題として子どもの連れ去りや、高齢者や障がい者等が自然災害等の危難に見舞われた時の生命安全を図るために、「助けや危険を知らせる音」の統一基準の作成を進めている。例えば、助けや危険を知らせる音の身近な例として防犯ブザー音があるが、2017年10月に東京都大田区で女子小学生に声をかけ誘拐しようとした際に、女兒が持っていた防犯ブザーを鳴らし、容疑者は現場から逃走したという事件があった。これは防犯ブザーの“音の効果”が発揮された事例であると思われる。また他にも防犯ブザー音に関する報道もあった。（文末の「報道関連」を参照）一方、防犯ブザーの音色は様々で、その音を聞いて、何の音であるか判断出来なければ、必ずしも助けようとする行動に結びつかない。その音を聞くだけで、皆が同じ解釈（助けを求めている音）ができ、同じ救難行動をとれることが大切である。災害や子どもの事件が後を絶たない今日、全ての人の命を守るために統一した音をデザイン・標準化することは大変有用であると考えます。

本稿では2015年から試行錯誤しながら取り組んでいる実践的な活動を報告し、助けや危険を知らせる音の標準化の必要性を提言する。

II. 助けや危険を知らせる音についての活動

「助けを求める音」は、例えば子どもが連れ去られそうになった時など、子ども本人（個人）が救助を求める音で、「危険を知らせる音」は、豪雨などの自然災害に遭った時など、周囲の人（不特定多数）に危険な状況を知らせる音である。どちらも、自らが助けを求めたり危険を周囲に知らせることがポイントであり、当研究会は両方の目的を果たす一つの音を作成したいと考えている。

当研究会は、助けを求める音の標準化に向けて、セミナーや様々な団体等との意見交換を多く行い、助けを求める音の標準化の重要性を訴え、実践的な活動を通して繰り返し意見を収集してきた。まず、緊急地震速報を考案された伊福部達先生を迎え、「助けや危険を知らせる音のセミナー」を開催（2016年10月）した。更に、産業技術総合研究所の音の専門家・（一財）日本規格協会・NPOキッズデザイン協議会、経済産業省との意見交換や、十文字学園女子大学・中部大学・昭和女子大学の学生達や聴覚障がい者の意見を収集し、音の標準化を進める上での情報や知見、及び音が標準化された場合の影響などについて検討した。また、経済産業省の「平成30年度標準化テーマ調査（新JISのテーマ募集）」にもエントリーした。

その結果、多くの賛同する意見やアドバイス等が得られた。特に若い人や聴覚障がい者からは、音の標準化の効果や期待など前向きな意見が得られ、提言の必要性を強く確信した。主な意見を紹介する。

1. 経済産業省国際標準課との意見交換(2017年2月13日)

経済産業省で実施された「高機能JIS等整備事業公募説明会」に参加し、その後、同省国際標準課を訪

聞き意見交換を実施した。JIS化に向けてのアドバイスを頂いたが、主な内容は次のとおりである。

- ・危険を知らせる音はJIS規格として策定することは可能か？
危険を知らせる音のJIS規格はできると考えている。
- ・防犯ブザーの音を標準化するのも一つ。その場合、電池工業会規格を改善（改定）することになる。但し、防犯ブザー音に限定された規格になり、当研究会が考えている社会課題の解決への寄与度も限定されてしまう。防犯ブザーに関しては、身近な危険を知らせる音の例としてセミナーなどで取りあげてきた。一方で、参加者からは様々なブザー音が存在することに問題意識を持ち、統一した方がいいとの意見が相次いだ。
- ・危険を知らせる音のターゲットは、「子ども・高齢者・障がい者の危険と防犯」と広範囲にわたるものと思われる。学術的にも的確で有効な「危険を知らせる音（音符あるいは音色）」を作ることは可能と思われ、専門家の協力も得られるであろう。
- ・JIS化のポイントは、メーカーを含めた利害関係者の協力・合意を得られるかだ。
JIS策定事務局をどこに受けてもらうかが特に重要と思われる。
- ・「危険を知らせる音」の工業製品への汎用的な適用を考慮すると、利害関係者の範囲は広がることから（防犯協会、学校、警察、警備保障会社、公共団体、キッズ携帯、高齢者スマホ、ウェアラブル端末、NHK・・・）どのような関係者に、制定事務局になってもらうかが課題となる。

2. 十文字学園女子大学授業(2017年5月29日)

当研究会は十文字学園女子大学における子ども服の安全に関する授業(学生約40名)を依頼されたが、その機会を利用して、授業の中で危険を知らせる音についても説明し、ブザーの音を聞いて貰った。授業後にアンケートを実施し、「危険を知らせる音が標準化されたら、あなたはどんな時、どんな場所で使いたいと思いますか」という質問に自由に記述して貰い、24名の学生から回答を得た。その結果、「声がでない、助けが必要、誰も気付かず」など“危険”について、かなり学生の関心があり、危険を知らせる機会においても、事故時や災害時には子どもや女性に限らず、一般の人にも知らせる音が必要との記述があり、高い関心がうかがわれた。アンケートの主な回答は次のとおりである。

(1) どんな時(場面) 場所で使いたいのか

- ・(標準化されたら)「何の音だろう？」と思わず、「助けて」ということが伝わり危険な時に使用できる。
- ・自らに危機が訪れた時、自分一人ではどうにもできない時、自分で言葉を発することができない時、誰も気づかない時、困った時に大人を呼びたい。(4人)

(2) どんな使い方がいいか、注意点など

- ・知人の子どもが小学一年生時に防犯ブザーを登下校時に鳴らして遊ぶという話を聞いた。音が鳴った時に、周りが子どものいたずらと決めつけてしまわぬ様、本当に危ない時に鳴らす音を用意する。もしもの時だけに使えるように誤発させない対策があれば良い。(2人)
- ・音が標準化されていないと、助ける側も音での判断が難しいので、日本での危険を知らせる音はこの音だと標準化されれば良い。

(3) どのような対応をとるか

- ・音のした方を見て、自分で対処できそうならする、そうでなければ警察などに通報する。
- ・(標準化されたら) 本当に危険な時に鳴る音なので、鳴ったら「どこかで何か起きた」と思い助けに行きたい。

3. 中部大学との意見交換(2017年9月4日)

中部大学の経営情報学部准教授から、指導しているESDエコマネーチーム(学生主体の標準化教育)所属学生5人と共に、標準化活動について意見交換をしたいとの申し出がNACSにあり、参加した。准

教授からは、「標準化教育(標準化を学ぶこと)を通して、社会人としての基礎力をつけたい」、学生からは「消費者と標準化とのかわりを学びながら、消費者の価値観の多様化や消費・取引形態の変化に対応した標準化を推進する」ことを目的に活動しているとの説明があった。消費者の標準化活動参画について有意義な意見交換を実施し、音の標準化についても貴重なアドバイスを受けた。

(1) 指導されている准教授からのアドバイス

- ・自分から助けを求める音ということで、大変いいところに目をつけられた。情報系の機関などに持ち込むといい。TC262の国内委員会などは関心があるかもしれないので、コンタクトを取ってはどうか。IECのHPに音の委員会があるので、その国内委員会に連絡する。
- ・どこかの企業が協力してくれればいいが。docomo、SoftBank、auなどの情報系ネットワーク企業などにもコンタクトをとってみてはどうか。
- ・自分も子どもに防犯ブザーを購入したが、音などもバラバラでどれを選んでいいかわからず、結局見た目に気に入った商品を購入した。
- ・高齢者、難聴者にも配慮が必要。
以前、聴覚障がいをもっている方に意見を聞いたところ、ブザー音の標準化には賛成していた。「聴覚障害には全く聞こえない人から少し聞こえる人まで様々な人がいる。音と一緒に点滅(赤がいい)や振動も欲しい。点滅があれば、それを見て自分たちも救助できる」との意見を紹介した。

4. 昭和女子大学学生からの意見収集(2017年11月28日)

昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科の授業(学生約70名)の1コマにおいて、防犯ブザー音を聞き比べ、学生から様々な意見を得た。殆どの学生は小学校で防犯ブザーを配布されており、現在もアルバイト先等から支給されている学生もいて、小学生や高齢者ばかりでなく、若い世代にも活用されていることが確認できた。防犯ブザーの音については、「SOSと感じられない」、「様々な音があるのに驚いた。音を統一した方がいい」や、「統一した音を作り、それを交番や家族に通報すると分かっているならば、いたずらに押す事もなくなる」等、標準化を望む声が多く関心が高いことを確認した。学生からの主な意見は次のとおりである。

(1) 音の統一の必要性について

- ・様々な音があり、聞こえてきた音が助けを求めているのか疑問を持つ可能性がある。標準化に賛成。
- ・子どもの事故を減らす対応が日本では遅い。防犯ブザー音も統一されてなく分かりにくく、危険や助けを求めているということが分かる統一した音ができればいい。大切だと思う、私も考えたい。

(2) “助けに行く”、“危機が分かる”という視点からみた意見

- ・助ける側にとって、「誰もが分かる音」が決められていると手を差し伸べやすいし、注意がむく。その音を聞いた人が早く駆けつけ、危機を免れやすくなる。
- ・防犯ブザーの音は小学生の時よく聞いていたが、最近は聞く機会が少なく忘れかけていた。事件や災害等が起きた時、ブザー音を聞き真っ先にかけることができるように、(統一した音を作り)忘れないようにして少しでも事件等を防ぐべき。
- ・大人になるにつれてブザーの音も存在も忘れてしまい、様々な統一性のないオリジナルな音をだす個々のブザーを子どもが鳴らしても、本当に周りの大人が危険に気づくか疑問。早く、緊急地震警報のように、誰が聞いても分かる、危険を感じる音ができ「誰もが暮らしやすく」をイメージした社会をつくるのが大事。協力できることがあったらしていきたい。(2人)
- ・防犯ブザーの音も標準化するべき。緊急性をもっと感じるような音でないと、周囲の混乱を招いたり、助けに来て貰えない可能性が考えられ、怖いと思った。

(3) その他の意見

- ・標準化はとてもよい。ブザーが鳴っていても、いたずらなのか、本当に危機なのか分からないが、鳴

らしたら必ず助けや警察が来ると思ったら、いたずらも減り信憑性がでる。

- ・小学生だけでなく、中高生も帰りが遅いが増えた為、未成年全般に対して配布・所持した方がいい。今のアルバイト先では支給され、毎回持参して帰宅している。
- ・久しぶりに防犯ブザーを見て、音もそれぞれ違い、改めて重要性を感じた。大きくなるにつれ、一人で夜道を歩く機会が増えたが、「何かあった時に自分の声で助けを求められるか」、と思うと、いくつになっても防犯ブザーは必要である。

5. 経済産業省からのヒアリング(2017年12月7日)

経済産業省が募集した「平成30年度標準化テーマ調査」に「防犯ブザー及びパーソナルデバイス等における警報・通報の基本的仕様に関する規格」をエントリーし、ヒアリングを受けた。以前から音の標準化について相談をしている。統一基準を作るためには、事務局を担える利害関係者を探さなければならないことと、通報の仕組みの標準化の前提として、危険を知らせる音自体を標準化したらどうかというアドバイスがあった。今後は連携できる企業等に声を掛けるようにしたい。ヒアリングの主な内容は次のとおりである。

(1) エントリーの内容 (標準化により期待される効果)

全国の新一年生や多くの高齢者に配布されている防犯ブザーの音色は様々で、助けを求めていると分からない。音を統一し普及すれば、犯罪遭遇時・災害被災時・体調不良等の危急時に、素早く対応でき効果的である。また、防犯ブザー・スマートフォン等のパーソナルデバイスを利用して利用者自らが、最も有効な伝達先(家族・最寄りの警察署・病院等を予め登録しておく)に即報する仕組みが構築・普及すれば、国民生活の安全に大きく寄与する。特に子ども及び高齢者の生活安全には大きく貢献できる。

(2) ヒアリングにおける意見交換

- ・「危険や助ける音のデザインに特化した方がいいのではないか？」理由としては、通信まで広げると総務省他いろいろな関係者にまで及び、合意が難しくなる。それより音に集中してコアのメンバー(少数)が集まり検討した方がいいように思われる。事務局を担ってくれるところが必要。
- ・防犯ブザーの規格の中で音だけを作る。または、音だけの規格をつくる、どちらでもやり方はある(JISとしてできる)。その後で通信システムに展開してもいいと思う。
- ・「消費者に、規格作りをする原案作成委員会の事務局(企業や団体)を探せというのは難しい」との意見に対し、「本来は、消費者からでたテーマを支援する(事務局を探す)のは、私たちの役目でもある」、「企業等にヒアリングに行くときは、紹介または同行してもいい」との説明があった。

6. 聴覚障がい者からの意見 ～音のユニバーサルデザイン～

独立行政法人国民生活センター理事長から、「『助けを知らせる音の標準化』というだけでなく、障がい者等も含めた、もっと大きなくくりで行った方がいい」とのアドバイスを受けた。そこで、聴覚障がい者から危険を知らせる音についての意見を求めたところ、助けや危険を知らせる音は、振動や光(色)の点滅などを付けることで機能が向上することが分かり、「情報のユニバーサルデザイン」に繋がるものと確信した^[1]。情報の一部である「音のユニバーサルデザイン」を目指したい。皆に危険情報を知らせる(または受ける)ことに貢献でき、更に、それを交番や家族、地域コミュニティーに通報する仕組みができれば一層効果的である^{[2][3][4]}。

(1) 早瀬憲太郎氏(聴覚障がい者・ろう児の為の国語教育を実践)の意見

子どもの安全からみても防犯ブザー等の助けを知らせる音の標準化は賛成。音は聞こえないので、振動や光の点滅(赤がいい)があれば尚いい。(自分達もいつも助けられるばかりでなく)助けを求める人がいれば助けられる。東日本大震災の時に、聴覚障がい者が、近くにいた被災者から助けを求められても聞こえないので、気が付かず、非難されることがあった。そんな時にも、光の点滅等があれば分り易く助けら

れる。(2017年3月 八王子市職員研修講座)

(2) 早瀬憲太郎、久美氏(ろう者として日本で初めての薬剤師)夫妻の意見

防犯ブザーは振動や光を付ければ、聴覚障がい者の不便解消(音が聞こえなく情報が分らない)につながる。是非推進して欲しい。

(2018年1月20日「障がい者だけでなくみんなが便利なユニバーサルデザイン(UD)講演会」)

7. NPO キッズデザイン協議会との意見交換(2018年1月24日)

本協議会は、「子どもたちの安全安心に貢献するデザイン」「子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン」「子どもたちを産み育てやすいデザイン」という3つのミッションのもと、次世代を担う子どもたちの健やかな成長発達に繋がる社会環境の創出に寄与することを目的として、さまざまな企業・団体が集まったNPOである。当研究会は、音の標準化についての支援要請と情報収集のために意見交換を行った。主な意見は次のとおりである。

(1) 防犯ブザーの音の標準化の可能性について

- ・事務局となる協会を決定し、協会を通して音を決めてもらうという順番で進めると良い。消費者からニーズがあることを伝えて、(一社)電池工業会か(一財)家電製品協会に打診してみてもいいか。
- ・「今、不便があるので、標準化して欲しい」という説明がないと、企業は標準化できないと思う。
「いろんな音があることで、危険が伝わらない。」ということも、消費者の声としてまとめてみてはどうか? マスコミに協力を求めるのも良いだろう。
- ・(公財)全国防犯協会や各PTA連合会にも声をかけ連携して、(一社)電池工業会に働きかけると良いだろう。子どもが危険を知らせる方法は、学校で警察に教えてもらうとよいのではないか。

(2) 当研究会からの情報提供及び意見

平成28年4月1日に施行された自殺対策基本法の一部を改正する法律の第17条は、心の健康の保持にかかる教育・啓発の推進等について、「学校は、保護者・地域住民等との連携を図りつつ、各人がかけがえのない個人として共に尊重し合いながら生きていくことについての意識の涵(かん)養等に資する教育・啓発、困難な事態、強い心理的負担を受けた場合等における対処の仕方を身に付ける等のための教育・啓発その他児童・生徒等の心の健康の保持に係る教育・啓発を行うよう努める。」と定めている。これを受けて、平成29年7月25日に閣議決定された、自殺総合対策大綱には、SOSの出し方に関する教育を推進すること等が新たに追加されている⁵。

自殺対策基本法に基づくSOSの出し方に関する教育は、防犯ブザー等の使用を明記してはいないが、自殺対策基本法の理念には、当研究会が目指す助けや危険を知らせる音の標準化と共通する部分が多分にあり、言葉に出して相談できない場合、助けを求める音を出すことで補完できる場合もあると思われる。公平公正なキッズデザイン協議会のような団体に子どもの安全のイニシアチブをとっていただきたい⁶。

III. 研究会内の意見交換

助けや危険を知らせる音の標準化は、子どもや高齢者への貢献についてはある程度想定されるが、果たして若い世代はどう捉えているか、研究会内で30~40代の研究会メンバーを中心に意見交換を行った。その結果、音が統一されていない現状や、子どもや高齢者と同居している場合とそうでない場合に情報の収集場所に違いがあるなどの現状がみえてきた。主な意見は次のとおりである。

1. 助けや危険を知らせる音を標準化する理由

- ・子ども自身は特に危険に関する意識が低く、自ら自分の身を守るには限界があり、また高齢者や障がい者についても同様のことが言える。勿論、いつ危険が迫るかは、健常者についても予測することはできない。もし、助けが必要な状況が発生した場合は、周囲に危険を察知してもらいたい。その際、助けや危険を知らせる音がどのような音であるのか確立されていない為、音が鳴っても、何の音なのか理解で

きず、取り返しのつかない事故などに巻き込まれる危険がある。

2. 助けや危険を知らせる音を標準化することにより期待できる効果

- ・助けが求められている、危険が迫っているといった状況下、周囲が瞬時にその状況に気づくことができる。(初動を早くできる) また、子ども等を危険から守る体制にスピーディーに入ることができる。(救急車がきたら、一般者は止まって道をあけるのが共通の認識であるような社会状態)

3. 現代社会の状況

(1) 抽出された事例

- ・会社によっては、女性に防犯ブザーが支給される場合もある。
- ・埼玉県のスマホアプリ「まいたま」では、警戒音とともに、画面が赤く点滅する、という機能がある。そのような機能や、音声と同時に発生する機能も、視覚・聴覚障がい者にも分かるため必要。

(2) 若い世代の状況

- ・一般的には子どもをもって初めてその重要性に気づくため、防犯ブザーの意義の認識は低いと思われる。一方、夫婦共働きの場合、子どもを常に親自身が見守ることが出来ない為、親は子どもの防犯への意識が高いと思われる。
- ・現在の 20 代後半～30 代前半は、防犯ブザーの効果や意味を実体験としてもっていない場合が多く、「知らない人に声をかけられてもついていけないように」と注意を呼びかけられた程度のものである。この年代層は、「ゆとり教育」への移行に伴う教育方針の変化が激しかったため、助けや危険を察知した際の対応について身につけた知識や経験は、人や地域によって様々と思われる。
- ・子どもをもつまでは、特に若者は、自身の安全を中心に考えるケースも多いと思われるが、子どもをもち、家族との関わり方が変わると、子どもや親の安全も一緒に考える機会が増える。
- ・子どもを持つ人と持たない人では、それぞれ情報を得る場所が異なる。前者は児童館や子育て支援センター等だが、後者はネットやテレビ、雑誌が主と思われる。

(3) 社会全体への意見

- ・現在は、携帯を 1 人 1 台もつことが一般的になりつつあるが、経済的に難しい人もいて、携帯電話普及率＝助けや危険を知らせる音の普及率、とは必ずしも捉えられない。小学生低学年や、高齢者は、仮に携帯電話をもたされても、使い方が分からないことがあるため、携帯電話に特化して助けや危険を知らせる音を普及させるのが“絶対的に”効果的とは、一概には言えない。しかし、多くの人が携帯電話を持ち歩いているのは事実であるため、携帯電話に助けや危険を知らせる音の機能を付与することは効果的であると言える。
- ・北朝鮮ミサイル問題で、Jアラートが話題になることが多くなったが、どの音が Jアラートなのかを学ぶ機会がない。しかし、マスコミに取り上げられたことなどで、Jアラートの存在は広く認知された様子である。このように、音の標準化(助けや危険を知らせる音がどんな音なのかという認識)においては、国民全体に興味をもってもらう必要がある。
- ・生き方が多様化した昨今、助けや危険を知らせる音については、誰にとってどんな音が効果的かという議論は、幅広い視野をもって行うべきと考える。そもそも、危険とは何か、助けとは何か、が人によって異なる現代では、「周囲の人の力を借りることに緊急性を要する」という認識を、老若男女、誰が聞いても瞬時に認識できるものが必要であろう。

4. これからの取り組み

- ・生き方や福祉が多様化しているため、どんな人にとって、どんな音が、助けや危険を知らせる音なのかを検証する為には、各方面に地道にヒアリングをしていくことが考えられる。また、ヒアリングの対象者を全国民とするのか、限定された人々にするのかも検討する。
- ・取り組みとしては、どのような人にとってどのようなことが危険であるのかを整理し、危険を知ら

せる音を決め、周知方法を考える、という順序だろう。

- ・行政、(一社)電池工業会、警察庁、学識研究等で定められた、今既に存在している「音」の定義を調べる。
- ・「どのような人(子どもや視覚・聴覚障がい者等)」にとって、「どのような音(画面、光、音声)」が効果的であるかを検討する。

IV. まとめ

これまで助けや危険を知らせる音の標準化の必要性を何度も各方面に説明し、賛同される多くの意見を得た。それらの情報収集や意見交換を踏まえ、まず、助けや危険を知らせる統一した音を作り、その標準化した音を、防犯ブザーをはじめ、携帯、スマホ、自治体等からの緊急速報システムにも適用することを提言・推進したい。また、聴覚障がい者に対しては、振動及び色や光の点滅を加えることにより音の伝達機能を補完できるものと思われる。振動や光の点滅は、誰かが助けを求めていると認知でき、障がい者自ら他者を助けることにも貢献できる。この音の対象者は、障がいの無い人だけではなく、障がいのある人・子ども・高齢者を含む全ての人であり、全ての音の使い手や受け手のことを考慮することが大切である。広く周知された緊急地震速報のように、その音(光も含め)を聞くだけで、皆が同じ解釈(助けを求めている音)ができ、直ぐに同じ救難行動をとれるようになることが重要であり、音のユニバーサルデザインに繋がると考える。災害や子どもの事件が後を絶たない今日、自分達だけでは身の安全を確保できない多くの生活者があることに着眼する必要がある。さらに、危険を知らせる最も有効な伝達先(家族・最寄りの警察署・自治会等)に即報する仕組みができれば一層効果的であると思われる。助けを求める、危険を知らせる際の標準化された音ができただけで、それを様々なデバイス・ネットワークに適用することを提言し、普及・啓発活動に繋いでいくことが大切である。

個人が社会を信じて SOS を発信できる仕組みの構築が何よりも重要である。助けや危険を知らせる統一した音をデザインし標準化することは、“誰も置き去りにしない”新しい社会の実現において、大変重要であることを強く訴えたい。

以上

<追補>

「報道関連」

①2017年4月23日の朝日新聞「オピニオン欄」で、63歳の読者から「防犯ブザーの音 知ってますか？」というテーマの投稿があり、防犯ブザー音の不明瞭さを指摘している。内容は次の通りである。

「小学校の新1年生たちに防犯ブザーが配られた、というニュースをテレビで目にした。千葉県で小学3年生の女の子が通学中に行方不明になり、遺体で発見されるという痛ましい事件が最近もあっただけに、防犯ブザーは大切だ。ニュースの中で、試しに鳴らす場面があり「シュルシュルシュル」と高めの音が響いて、私は「あ、こんな音がするんだ、不思議な音だなあ」と、この年になって初めて知った。そして、ふと心配になった。この不思議な音が、「助けを呼んでいる」と分かる人はどれくらいいるのだろうか。子どもがせっかく鳴らしても、その意味がわからなかったら話にならない。このニュースのように、防犯ブザーの音を知ってもらう機会を増やすべきだ。」

②2017年10月、京都大田区で女子小学生に声をかけて誘拐しようとしたとして、20代の男が逮捕された。自宅近くの路上で、小学2年生の女子児童(8)に「車に乗っていないか？」と声をかけ、連れ出そうとしたが、女子小学生が持っていた防犯ブザーを鳴らしたところ、犯人は現場から逃走しその後逮捕された。



「JIS L 4129に関する報告」

当研究会は、JIS L 4129の活動に対し、「子ども服の安全性や子どもの日常生活の安全性を大きく改善できた」として、「第10回・10周年記念 日本女子大学家政学部賞」を受賞し、2017年10月に記念講演を行った。私たちのモットーである「知りたい事や分からない事は消費者の視点で実際に現場に向かい

調査、自らの目で確かめた事実に基づいた実践的な提言と実行」は、日本女子大学家政学部の HP にある家政学の定義、「生活者であることに立脚し、人間生活とその環境を追究することで人類の幸福に貢献する実践的な学問」に一脈通じるところがあると思われる。私たちの活動を家政学の視点からも評価いただいたと考える。

【参考文献】

- [1]標準化と品質管理全国大会2009「情報バリアフリーの実際」小高公聡（2009年10月16日資料 601-①）
- [2]「サイン音のユニバーサル・デザイン」 倉片憲治 関喜一 佐藤洋 日本音響学会誌 68 巻 1 号 (2012)
- [3]「音のユニバーサルデザイン」 武者圭 日本音響学会誌 65 巻 3 号 (2009)
- [4]「情報のユニバーサルデザイン」 松延拓生 門田利彦 人間工学第 36 巻特別号 (2000)
- [5]「自殺総合対策大綱～誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して～」平成 29 年 7 月 25 日閣議決定
- [6]「青少年を取り巻く課題」文部科学省初等中等教育局児童生徒課生徒指導室長 松林高樹（第 34 回 全国青少年相談研究集会 平成 30 年 1 月 18 日資料）
- [7]「SUI (Sound User Interface) : サイン音を用いた情報表示とそのデザイン」 和氣早苗
- [8] 日本工業規格 JIS S 0013 高齢者・障害者配慮設計指針-消費生活製品の報知音
- [9] 日本工業規格 JIS T 0902 高齢者・障害者配慮設計指針-公共空間に設置する移動支援用音案内
- [10]「SBAS 1602 防犯ブザー(2009)」(一社) 電池工業会
- [11]「ゴジラ音楽と緊急地震速報」伊福部達監修、筒井信介著 (2011)
- [12]「福祉工学の挑戦」伊福部達 (2004)
- [13]「音響学入門」 鈴木陽一 赤木正人 伊藤彰則 佐藤洋 荻木禎史 中村健太郎 (2011)

【標準化を考える会 会員】

浅見豊美、乾洋子、岩瀬美希、遠藤朝美、大久保紀代美、加藤明子、杉田努、高木秀敏、高崎美代子、高杉陽子、滝口順司、田近秀子（代表）、南條武、藤田雄一郎、古田章子、古谷由紀子、益田昭彦、三澤和子、森口美加子、秋庭悦子（オブザーバー）、太田亮二（オブザーバー）

標準化を考える会 HP : <http://nacs-east.jp/kenkyukai/hyoujyunka.htm>